

山本泰次郎先生のこと（４）

無教会主義とはシッカとした主義と信仰に生きることである。しかし今日ではただ内村先生を師と仰ぐとか、教会に属さないとかいう事ぐらいに考えられ、主義も信仰も忘れられてしまった。実に憤慨に耐えない。

（「聖書講義」 1979年2月号）

この「東京だより」本年1月31日の記事は、山本先生の無教会主義に関するさいごの言及である。山本先生は実に最も徹底した無教会主義者であり、生粋の無教会人であられた。先生がどのような意味で無教会主義者であられたか、またどのような無教会人であられたかを、先生の生涯とその生き方から考えてみよう。

先生の無教会主義は何よりも独立主義であった。「内村鑑三の根本問題」の「初版まえがき」で先生は次のように言っておられる。

わたしは今日まで、ほとんど使徒パウロと内村先生だけで生きてきました。……しかしわたしは、信仰のことだけは、先生の受け売りはすまい、先生の垂流にはなるまいと、一所けん命につとめてきました。そのため先生の死後20年間ほとんど先生の著作は読みませんでした。

信仰において独立であられた先生が、他のすべての点で独立主義をつらぬかれたことは言うまでもない。伝道の点でも、先生は文書伝道に徹底されたが、これも一つには先生が健康にすぐれないために伝道旅行に出かけられなかったこと、また先生が文書伝道こそ日本における最善の伝道方法だと信じておられたことによるが、私には、さらに先生が成可く他の人のやる伝道はしたくない、他の人とはちがった方法で伝道したい

と考えておられたからだと、思われてならない。先生もまたパウロと同じように、その「切に望んだところは、他人の土台の上に建てることをしないで、キリストの御名がまだ唱えられていない所に福音を宣べ伝えることであった」（ローマ15・20）。先生はご自分の集会、雑誌、著書について一切宣伝をなさらなかった。まして、いわゆる「集会の形成」などということは絶対になさらなかった。もちろんどんな集団にも属されなかった。先生は実にキリストにある自由人、誇り高き独立伝道者であられた。

昨年暮に先生の岳父に当たる斉藤茂夫氏が亡くなられた。その時の葬儀の様相について先生は「東京だより」（本年1月号）に次のように書いておられる。

（通夜）……驚いた事に牧師の祈禱（2回）、式辞がすべて「式文」なる書物に印刷されていて、それを朗読するだけである。カトリック以上に儀文化されているのを見て、たまげた。

（葬儀式）……牧師の司式、祈禱（すべて書物の式文の朗読）があり、最後に政池仁君の祈禱があったが、これは真情のこもったもので、会衆の心を打った。無味乾燥で、砂をかむような葬儀式が政池君のこの祈禱で漸くキリスト教らしい生気を与えられ、感謝に堪えなかった。何と言っても「無教会」であるをつくづく感じた。……………

無教会主義は非「宗教」主義である。言うことも、することもすべて成可く「宗教的」でないのがよい。非宗教化、世俗化の甚だしい此の時代に、宗教人は一層「宗教化」することをもってこれに対抗しようとする。しかし、もともと平信徒主義である無教会主義はちがう。もともと非「宗教」的であることによって、このような時代にこそ一層徹底的に宗教でありうるのである。それにしても、先生が亡くなられて一番寂しいことの一つは、そんなに何う折があったわけではないが、先生の真情あふれる、力強いお祈りをお聞きすることが出来なくなったことである。

無教会主義を定義することは難しい。しかしそれが何であるよりも内村先生の言う「神」第一主義であることは確かである。即ち内村によれば、神の生命であるキリスト教、霊によって生まれたキリスト信者は、無形である生命そのものである。生命はしかし形態をとって現れる、それは決して悪いことではない。（従って、教会は有るもよし無きも可なりである）。ただ神と形とが同視され、さらに、しばしそうなるのだが、形が神を圧する時に、神は生命を保つために形を離れ、形にそむき、形を捨てる。これが無教会主義である。

私の言葉で言いかえれば、どこまでも神を貴ぶ（無形なもの、見えないものに価値を置く）、形について無頓着、形が神を圧することを見ぬく洞察と、それに対する怒り、こうした心的態度が無教会主義ということになる。そして山本先生はまさにその意味において、徹底した無教会主義者であられたと、私は思うのである。これはすでに書いたことだが（『山本泰次郎聖書講義双書』の編集について）キリスト教図書14）、先生は本当に印刷、造本の専門家であられた。これは若い時に岩波版内村全集の編集に参加されて以来、ご自分の雑誌、著書の執筆、編集、そして教文館版内村全集の編集を通して身につけられたものであろう。その上先生は万事オーソドックスであられたから、本のことでも原稿から校正、割付けから製本に至るまで、実に細心慎重、至らざるはないという風であられた。私は内村全集と双書の編集をお手伝いして、ある程度親しく先生のお仕事ぶりを拝見したわけだが、今考えると私のように物事を大雑把にしかできない人間がよく先生に大したお叱りも受けずに勤まったと思う。何故かと考えてみると、これは一に先生の「形には無頓着」という態度のおかげと思いがたるのである。これは私ばかりでなく、本屋も印刷所なども、先生から見ればずい分いい加減なところがあつたに違いないが、先生はふしぎな程無頓着であられた。これは晩年になるほど顕著だったと思うが、恐らく先生には福音の内実をしかと伝えるという神のことしかお心になかったのであろう。その器はもう先生にとってどうでもよかったのであろう。先生はその伝道事業におい

でも、パウロと同じく「割礼（形）のあるなしは問題ではない」（ガラ 6・15）主義であった。

最後に、無教会主義は非体制（敢えて反体制と言わない）主義であることを付け加えておきたい。これは当然の帰結である。天皇親愛にかけては人後に落ちなかった内村は、生涯野に在って藩閥政府に対する嫌悪をかくさなかった。市民としての正当な義務を果たすことを名誉とされた山本先生は（例えば本年2月26日、3月6日の日記参照）、農商務省を辞して伝道に立たれてから永眠されるまで、政府はもちろん、いかなる意味の体制とも自らを同定されなかった。この点一部無教会人と全く違っておられた。何しろ先生は、反体制的無教会人でさえ珍重する「岩波文化」を全く無視しておられた程に、非体制的であられたのである。

（所載）「テコア通信」第101号

1979年8月